

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24330158

研究課題名(和文) HIV陽性者のヘルス・プロモーション支援に向けた当事者参加型調査研究

研究課題名(英文) Participatory Research of health promotion of people living with HIV in Japan

研究代表者

井上 洋士 (INOUE, YOJI)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：60375623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、HIV陽性者の支援をしていく上で健康保持・増進に関連するHIV陽性者ならではの支援ニーズとして重点的な項目は何だと考えられるのかを明らかにすることである。組織的・系統的なParticipatory research方式をとり、日本国内在住のHIV陽性者を対象として、インターネットを通じた調査を2013年1月から2014年2月まで実施した。1095人からの回答を得、913人からの回答を有効と判断し、分析した。調査項目は、健康状態、通院、アディクション、周囲の人々との関係、スティグマ、抑うつ・不安度(HADS)、ストレス対処力(SOC)など、多岐にわたった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to make it clear what are the main domains of support needs for people living with HIV in Japan, related to their health promotion. We adapted systematic and systematical participatory research and a survey was conducted from January, 2013 to February, 2014 through the internet targeted for the HIV-positive person in Japan. Responses from 1095 people were acquired, and responses from 913 people were effective and analyzed. Health issues, going to hospital, addictions, relationship with their surrounding people, stigma, depression and anxiety (HADS) and the sense of coherence (SOC) were investigated.

研究分野：健康社会学

キーワード：HIV 当事者参加型研究 ヘルスプロモーション 患者 スティグマ 健康 ケア アディクション

## 1. 研究開始当初の背景

我が国の HIV 陽性者数は、2011 年において 2 万人近くに達している<sup>1)</sup>。HIV 感染症は、1983 年に初の症例が米国において報告されて以来、しばらくは「死ぬ病」として恐れられてきた。しかし、1990 年代に著効を奏する抗 HIV 薬が開発され、治癒はしないものの、適切な治療を受ければウイルスを抑え込むことで長期的な健康維持が可能になった。そして「死から免れること」から「いかに生活をしつつ健康管理していくか」に、HIV 陽性者の健康管理はシフトしつつある<sup>2)</sup>。

この状況は、国内外で 1980 年前後から起こった健康と保健医療におけるパラダイムシフトに類似した動きであるともいえよう。つまり、医学モデル・疾病モデルをベースとして、異常や症状、疾病などネガティブ面を除去したり軽減したりするというものから、社会モデル・生活モデル、つまり正常、活力などポジティブな面の維持や強化を目指すというパラダイムシフト<sup>3)</sup>である。

国内の HIV 陽性者をめぐる状況を見ると、生活面・社会面で引き続き多くの人を抱えている独自の課題がある。たとえば、「HIV」について「死の病」とのイメージを持っている人が依然として多い点、HIV 感染症がステージマを強く付与されている点、性感染症のためセクシュアリティの課題に直面せざるを得ない点、日常生活関連の情報獲得機会が不足している点等である。申請者らが過去に行った小規模調査でも同様の側面が示されていた<sup>4)</sup>。また同じく申請者が行った薬害 HIV 感染被害者に限った中規模調査でも、薬害という背景が性感染とは異なるとはいえ、QOL の重要な構成要素として社会関係の多領域が示された<sup>5)</sup>。こうした生活面・社会面の諸課題が直接・間接に働き、本来的には健康保持や向上が十分に可能であるにもかかわらず、結果として健康保持能力を失い必要な健康管理行動をとれず、健康にダメージを受けている場合も数多いものと思われる。しかし、薬害被害者以外の HIV 陽性者については、現在の日本国内のほとんどを占めるにもかかわらず、事例レベルでの報告が断片的にあるだけで、総合的にこの状況を把握した調査研究はない。健康保持能力、ひいては HIV 陽性者のヘルス・プロモーションを念頭においたとき、QOL の広範にわたり支援されるべきニーズがあると推察され、それらの実態を把握すべく、調査研究を実施する必要があると考えられる。特に、医療従事者からの視点だけではなく、HIV 陽性者オリエンテッドに生活面での課題を調べることが不可欠だろう。

文献的にも、HIV 陽性者 QOL の先行研究をデータベース医学中央雑誌により調査したところ、キーワードとして HIV、生活、調査 HIV、QOL を用い 1983-2011 年の文献を検索すると、会議録を含めても 85

本、87 本のみ、原著論文に限ると 32 本、10 本のみである。内容を例に示すと、日本国内の HIV 陽性者研究は 14 本のみ、うち福祉制度利用 2 本、薬害 HIV 関係 2 本と偏っており、日本国内の HIV 陽性者とその QOL に焦点を当てた生活モデル・社会モデルの調査研究はきわめて少ない。ちなみに、PubMed でと同様に HIV、life、survey をキーワードとして検索すると 3000 件を超えており、日本における取り組みの遅れを強く示唆させる。

### <引用文献>

- 1) 厚生労働省エイズ発生動向委員会 . 平成 22 年エイズ発生動向年報 . 厚生労働省エイズ発生動向委員会 . 2011 .
- 2) Schiltz, M. A. HIV-positive people, risk and sexual behavior. *Social Science & Medicine* 50 : 1571-1588, 2000.
- 3) 園田恭一 . 社会的健康論 , 東信堂 , 2010 .
- 4) Inoue Y, Yamazaki Y, Seki Y, Wakabayashi C, Kihara M . Sexual activities and social relationships of people with HIV in Japan. *AIDS Care* 16 : 349-362, 2004.
- 5) 井上洋士, 山崎喜比古, 伊藤美樹子編 . 健康被害を生きる - 薬害 HIV サバイバーとその家族の 20 年 . 勁草書房, 2010.

## 2. 研究の目的

本研究では全体として、組織的・系統的な当事者参加型リサーチ形式をとり、日本国内在住の HIV 陽性者約 1000 人を対象として、インターネットを通じた量的調査を実施する。HIV 陽性者の支援をしていく上で、健康保持・増進に関連する HIV 陽性者ならではの支援ニーズとして重点的な項目は何だと考えられるのかを明らかにすることを目的として、健康状態や健康保持能力、通院、健康管理行動、就労、経済、ソーシャルコンタクト、性生活などを調査項目とし、HIV 陽性者の QOL (生活の質) を総合的に捉える。また健康状態や健康保持能力と他の変数間の関連を分析する。これらの結果をもとに健康保持・増進に向けた支援ニーズの明確化と支援施策の整備の方向性を定め、HIV 陽性者のヘルス・プロモーションを図ろうとするのを全体構想のゴールとする。

## 3. 研究の方法

日本で初めて、日本国内在住の HIV 陽性者を対象とした大規模な WEB 調査を実施した。調査協力者は、申請者らがこれまで推し進めてきた全国の患者ネットワークや医療機関などとのつながりを活用し、これらの組織・人の協力を得る形でリクルートした。最終的には、1000 名程度の調査協力者が得られることを目標とした。これは、日本全国の HIV 陽

性者数のおよそ5%にあたる。遂行に際しては系統的・組織的な当事者参加型リサーチ形式をとるものとし、調査の立案から成果報告まで当事者であるHIV陽性者と対話しながら進める。そのため、調査研究の運営にはステアリンググループ(運営グループ)を設置し、また日本全国の当事者が数多く参加する形でレファレンスグループ(調査検討グループ)を設けた。

調査に関する詳細は以下の通り。

#### (1)対象と方法

- ・調査期間：2013年7月20日から2014年2月25日まで
- ・調査対象：HIV陽性であることが検査ですでにわかっている日本国内在住のHIV陽性者。
- ・調査方法：無記名自記式ウェブ調査。ただし、ただし沖縄県の一部地域に限り、印刷媒体による調査も併用しました。
- ・調査回答者：1,095人
- ・分析対象：2014年3-4月にかけて回答されたデータを精査し、不正回答・重複回答の除外の作業を行い、917人の回答を有効回答と判断(有効回答率83.7%)。分析対象は、国外在住の4人を除く913人のデータ。

#### (2) 調査研究のプロセス

当事者参加型リサーチ形式の一環として、全国のHIV陽性者19名に研究者も加わる形でのレファレンスグループ会議を3回(12年7月、13年2月・6月)開催した。また補完的に、個別で話し合いの場を設けたり、ML上で相互にやりとりをしたり(13年7月20日までで245回)した。

調査回答協力者のリクルートでは、広報をおもに担当する組織として、HIV陽性者が中心となった「広報ワーキンググループ」を設け、オンラインおよびオフラインにより、リクルートを多角的に実施した。オンラインでは、HIV関連NGOウェブページでのバナー展開、HIV陽性者限定参加SNSでのバナー展開とPR、TwitterとFacebook展開、公式Twitterと公式Facebook展開、MSM(men who have sex with men)向けサイトやスマホアプリでのバナー広告展開、HIV陽性者によるブログでの調査紹介協力などを実施した。オフラインでは、HIV診療拠点病院やHIV診療を行っている医療機関、MSMコミュニティセンター、HIV関連NGOなどでのフライヤー(チラシ)配布とニュースレター等での記事掲載を主に実施した。

さらに、HIVに関連する全国のNGO・NPO・コミュニティセンターなど、総計21の機関の協力を得ることとなり、加えて、万一回答中に回答協力者が調子悪くなった場合の電話相談対応窓口について5つの機関が対応・担当した。

#### (3)倫理的配慮

調査データの扱いの際には、プライバシー

を十分に守り、また個人を特定される恐れがあるデータが万一あった場合には個人を特定されないような形にした。回答データはSSLにより暗号化されて送信される形をとった。回答されたデータそのものはHIV Futures Japan プロジェクトの研究者グループメンバー以外の人々の目に触れることはないよう、パスワードをかけたリ、バックアップデータを鍵のかかる棚に入れるなど、細心の注意を払った。

本研究は、放送大学及び国立病院機構大阪医療センターの研究倫理委員会に申請し承認を得た。

#### 4. 研究成果

##### 1) 回答者の属性

性別は男性が95.8%、女性が3.7%であった他、その他0.2%、答えたくない0.1%という回答も含まれた。セクシュアリティはゲイ・レズビアン(同性愛者)が78.6%、バイセクシュアル(両性愛者)が10.5%、ヘテロセクシュアル(異性愛者)が8.7%であった。

回答者の年齢は、最年少は20歳、最年長は70歳であり、平均年齢は38.1歳(標準偏差8.1)であった。年代別に見ると、30歳代が41.0%ともっとも多く、ついで40歳代34.1%が多くなっていた。

回答者の居住地は鳥取県を除く46都道府県にまたがり、上位5都道府県は東京都29.9%、大阪府14.2%、愛知県6.6%、北海道4.5%、神奈川県4.4%で、関東地方と近畿地方をあわせて7割近くとなった。地域は中心市街地または郊外住宅地が多く、全体の95.7%を占めた。

##### (2) 健康状態

最新のCD4細胞数は、120人(13.2%)が200個/ $\mu$ l以下、最新のHIVの血中ウイルス量(HIV-RNA)は498人(54.5%)が検出限界未満であった。

過去1か月間の睡眠についてアテネ不眠尺度により調べたところ、回答のあった891人のうち49.2%が6点以上となり不眠症の疑いがあった(図1)。

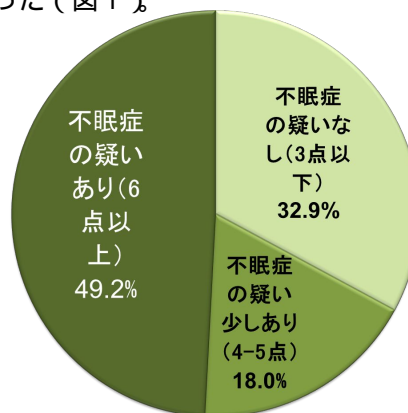


図1 アテネ不眠尺度による不眠症の疑い(%, n=891)

### (3)通院

回答者 913 人のうち、HIV 治療を目的として医療機関へ受診しているものは 881 人 (96.5%) であった。

回答者全体の 38.1% は、かかりつけ医 (風邪をひいたとき等、気軽に受診できる近隣の医療機関) がいると回答した。しかし、かかりつけ医のいるもののうち、約半数にあたる 49.1% (348 人中 171 人) は、自身が HIV 陽性であることをかかりつけ医に伝えていなかった (図 3-6)。また、かかりつけ医のいないものの 52.0% (563 人中 293 人) は、かかりつけ医を必要としているにもかかわらず、その通院先を確保できていなかった。

また、回答者の 43.2% は、かかりつけ歯科医がいると回答したが、約半数にあたる 41.4% (394 人中 163 人) は、自身が HIV 陽性であることを通院先に伝えていなかった。また、かかりつけ歯科医のいないものの 63.6% (517 人中 329 人) は、かかりつけ医と同様、その通院先を必要としながらも、確保できていなかった。

### (4)アディクション

何等かのアディクション (依存症) であると医師から診断されている人は 85 人 (9.3% : 参加者全体の %、以下同様) であった。診断されたアディクションの種類のうち、最も多いものから順に、ニコチン依存 32 人 (3.5%)、薬物依存 20 人 (2.2%)、アルコール依存 10 人 (1.1%) であった。

図 2 のように、これまでに、何らかの興奮、落ち着き、強い幸福感、幻覚などをもたらす薬物や物質を使ったことがないと述べた人は 234 人 (25.6%、参加者全体の %、以下同様) にとどまった。また、過去 1 年の間に、脱法ドラッグ・合法ドラッグ、ラッシュなどの亜硝酸アミル系、覚せい剤、5MeO-DIPT、大麻、MDMA、LSD、マジックマッシュルーム、ヘロイン、コカイン、有機溶剤、エアダスター・スプレー・ガス、医療用医薬品 (リタリン・ケタミンなど) のうち、いずれかを使用したことがある者は 285 人 (31.2%) であった。

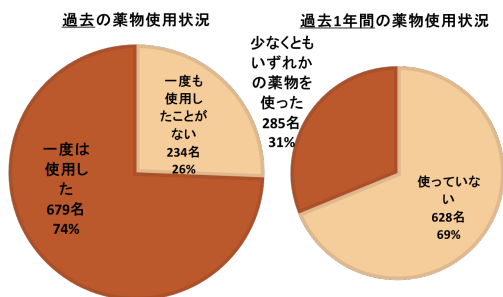


図 2 これまでの薬物使用経験 (左) と過去 1 年間の薬物使用状況 (右)

最近 6 か月間にお酒を飲んだという人は 717 人 (78.5%) で、そのうち久里浜式アル

コール症スクリーニングテスト (KAST) を回答したのは 687 人であった。次に、判定の結果は、正常飲酒者は 374 人 (54.4% : KAST 回答者 687 人における %、以下同様) で、問題飲酒予備軍に該当する者は 169 人 (24.6%)、問題飲酒群は 30 人 (4.4%)、重篤問題飲酒群は 114 人 (16.6%、全体のなかでは 12.5%) であった。

### (5)周囲の人々との関係

913 人中、854 人 (93.5%) が、HIV 陽性であることを少なくとも 1 人以上に伝えていた。伝えた相手として多くあげられたのは、友人が 449 人 (49.2%)、同じ HIV 陽性者同士が 407 人 (44.6%)、母親が 354 人 (38.8%) であった。また、303 人 (33.2%) が、過去に付き合っていた相手に伝えていた。

HIV に関連した人的ネットワークの広がり、陽性とわかった前後について尋ねたところ、自身が HIV 陽性であることを知る前は、HIV やエイズについて率直に話題にできる人は、誰もいない人が多く、リアルでは 551 人 (60.4%)、ネット上では 725 人 (79.4%) が、誰もいないと回答していた。陽性であることを知った後は、誰もいないという人は、リアルでは 204 人 (22.3%)、ネット上では 462 人 (50.6%) と、知る前より減少していた。

### (6)スティグマ

HIV に対する社会からの偏見についてどのように感じているか (外的スティグマ) については、「私が HIV 陽性であることを知っている人が周囲に誰ひとりいない状況が日常生活では多い」という人は、609 人 (66.7%) であり、半数以上を占めていた。また、「HIV 陽性であることを誰かに打ち明けることは危険なことである」では、743 人 (81.4%) が、「HIV 陽性であることを誰か他の人に話すときにはとても用心する」では、793 人 (86.9%) が「そうである」と回答しており、8 割以上の人 が HIV 陽性である事を打ち明けることに関しては、かなり注意を要していることが伺われた。

一方で、内的スティグマと位置づけられる「HIV に対する社会からの偏見による行動の自主規制」については、「HIV に感染していることは恥ずかしいことである」で、「そうである」と回答したのは、440 人 (48.2%) と約半数であった。

### (7)抑うつ・不安およびストレス対処能力

抑うつ・不安は HADS (Hospital Anxiety and Depression Scale) を用いて測定した。まず、不安障害傾向については、「不安障害なし」385 人 (42.2%、HADS 不安項目回答者全 913 人あたりの %、以下同様)、「不安障害の疑い」223 人 (24.4%)、「不安障害の可能性が高い」305 人 (33.4%) であった。次に、うつ病傾向について、「うつ病の傾向なし」は 410 人 (45.1%、



HADS うつ病項目回答者 909 人あたりの%、以下同様)「うつ病の疑い」236 人(26.0%)「うつ病の可能性が高い」263 人(28.9%)であった。

なお先行研究調査結果との比較を表 1 に示すが、いずれと比較しても、今回の対象者での抑うつ・不安度が高いことが判明した。

表 1 抑うつ・不安度の先行研究との比較結果

	不安	うつ	総計	論文・発表時期
Futures Japan (N=913)	平均8.58±4.76 疑い24.4%、可能性が高い33.4%	平均8.12±4.22 疑い6.0%、可能性が高い28.9%	平均16.71±7.98	2014
東日本大震災3ヶ月以内の一般住民+震災被災者(N=3455, 含被災者1083)	平均5.92±2.84 (うち被災者のみ平均6.44±2.74)	平均7.67±2.68 (うち被災者のみ平均7.66±2.47)	平均13.59 (うち被災者のみ平均14.10)	Kyutoku, et al. PLoS ONE 7(2), 2012. ※各々の検査で33で得点化されているものの約21の再検査が相当数に達するよう計算
一般女性会社員(N=62)	疑い9.7%、可能性が高い9.7%	疑い21.0%、可能性が高い3.2%		八田、他、心身医学 38, 309-315, 1998.
男子大学生(N=1159)	平均6.43±3.80	平均7.32±3.17	平均13.75	Arai, et al. 心身医学 45:865-871, 2005
薬害HIV感染被害者(N=252)	平均7.9±4.3	平均6.9±4.5	平均14.8±7.9	清田、井上他、2010
がん(82%乳がん)外来患者(N=619)	70歳以上平均4.5±3.2、70歳未満平均4.9±3.7	70歳以上平均5.1±3.5、70歳未満平均4.9±3.7	70歳以上平均9.6±6.0、70歳未満平均9.8±6.9	Akechi, et al. Jpn J Clin Oncol 42:704-710, 2012

SOC は、ストレス対処・健康保持機能をもつ、人生に対する見方や考え方における特徴的な感覚のことで、この感覚が高いとよりストレスに強く健康になりやすいとされ、ストレス対処力や「生きる力」に近い感覚とされている。このSOCについて、今回参加者の平均得点(標準偏差、以下同様)は51.0(12.9)点であった。なお、一般住民対象の全国代表サンプル調査の結果では、平均得点は59.0(12.2)点であった。

年代別に平均点(標準偏差)をみると、24歳以下(25人)48.3(16.2)点、25~34歳(282人)49.6(11.7)点、35~44歳(416人)50.9(12.8)点、45~54歳(161人)52.4(13.8)点、55歳以上(21人)62.3(13.2)点であった。なお、全国代表サンプル調査の結果では、25~34歳54.6(11.7)点、35~44歳56.7(11.6)点、45~54歳57.2(11.3)点、55~64歳61.7(11.8)点であった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

井上洋土、戸ヶ里泰典、細川陸也、阿部桜子、吉澤繁行、若林チヒロ、大木幸子、板垣貴志、高久陽介、矢島嵩。【長期感染に伴うさまざまな問題】HIV陽性者をめぐる今日の課題 HIV Futures Japan プロジェクトでの検討プロセスを踏まえて、日本エイズ学会誌 15(2): 85-90, 2013 査読無

[学会発表](計 20件)

井上洋土。日本初のHIV陽性者対象の大規模ウェブ調査「Futures Japan HIV陽性者のためのウェブ調査」～新たに誰のボイスを

拾うことができたのか～、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月  
細川陸也、井上洋土、戸ヶ里泰典、高久陽介、矢島嵩、板垣貴志、阿部桜子、吉澤繁行、大木幸子、若林チヒロ、片倉直子、山内麻江。HIV陽性者の医療機関への通院状況、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月

板垣貴志、鈴木達郎、井上洋土、戸ヶ里泰典、高久陽介、矢島嵩、阿部桜子、細川陸也、吉澤繁行、大木幸子、若林チヒロ、片倉直子、山内麻江。「Futures Japan HIV陽性者のためのウェブ調査」における回答者属性の特徴の検討、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月

井上洋土、戸ヶ里泰典、細川陸也、阿部桜子、板垣貴志、片倉直子、山内麻江、吉澤繁行、高久陽介、矢島嵩、若林チヒロ、大木幸子。HIV陽性者の陽性判明後の性行動及び性の相談に関連した経験に関する調査研究、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月

細川陸也、井上洋土、戸ヶ里泰典、高久陽介、矢島嵩、板垣貴志、阿部桜子、吉澤繁行、大木幸子、若林チヒロ、片倉直子、山内麻江。HIV陽性者の老後に対する不安について、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月

山内麻江、井上洋土、戸ヶ里泰典、高久陽介、矢島嵩、板垣貴志、阿部桜子、細川陸也、吉澤繁行、大木幸子、若林チヒロ、片倉直子。HIV陽性者の慢性疾患、自覚症状及び睡眠状況に関する調査研究、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月

戸ヶ里泰典、井上洋土、高久陽介、矢島嵩、板垣貴志、阿部桜子、細川陸也、吉澤繁行、大木幸子、若林チヒロ、片倉直子、山内麻江。HIV陽性男性におけるメンタルヘルスとHIV/AIDSを巡る孤立状態との関連、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月

阿部桜子、井上洋土、戸ヶ里泰典、高久陽介、矢島嵩、板垣貴志、細川陸也、吉澤繁行、大木幸子、若林チヒロ、片倉直子、山内麻江。HIV関連のスティグマが陽性者のメンタルヘルスに与える影響について、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月

阿部桜子、井上洋土、戸ヶ里泰典、高久陽介、矢島嵩、板垣貴志、細川陸也、吉澤繁行、大木幸子、若林チヒロ、片倉直子、山内麻江。HIV陽性者におけるソーシャルサポートネットワークの実態について、第28回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2014年12月

戸ヶ里泰典、井上洋土、高久陽介、矢島嵩、板垣貴志、阿部桜子、細川陸也、吉澤繁行、大木幸子、若林チヒロ、片倉直子、山内麻江。HIV陽性者男性における依存性薬物使用の実

態とその関連要因、第 28 回日本エイズ学会  
学術集会・総会、大阪、2014 年 12 月

細川陸也、井上洋土、戸ヶ里泰典、若  
林チヒロ、大木幸子、矢島嵩、高久陽介、  
板垣貴志・HIV 陽性者の子どもを持つことへ  
の思いと医療現場における相談体制の実態、  
第 73 回日本公衆衛生学会総会、栃木、2014  
年 10 月

井上洋土、戸ヶ里泰典、細川陸也、阿部桜  
子、板垣貴志、片倉直子、山内麻江、若林チ  
ヒロ、大木幸子、高久陽介、矢島嵩・HIV 陽  
性者における薬物使用の実態に関する調査  
研究、第 13 回日本アディクション看護学会・  
学術集会、名古屋、2014 年 9 月

井上洋土、患者さんの療養と生活～大規模  
インターネット調査結果が示すもの～、日本  
病院薬剤師会関東ブロック第 44 回学術大会、  
大宮、2014 年 8 月

井上洋土、戸ヶ里泰典、細川陸也、片倉直  
子、阿部桜子、若林チヒロ、大木幸子、高久  
陽介、矢島嵩、桜井啓介・全国の HIV 陽性者  
におけるポジティブヘルス諸概念の実態に  
関する調査研究、第 55 回日本社会医学学会総  
会、名古屋、2014 年 7 月

井上洋土、戸ヶ里泰典、阿部桜子、若林チ  
ヒロ、板垣貴志、細川陸也・HIV 陽性者対象  
のウェブ調査における当事者参加型形式で  
の実査・広報展開プロセス HIV Futures  
Japan プロジェクトでの調査回答協力者リク  
ルットに着眼して、第 40 回日本保健医療  
社会学会大会、仙台、2014 年 5 月

井上洋土、戸ヶ里泰典、高久陽介、矢島  
嵩、板垣貴志、阿部桜子、細川陸也、吉澤  
繁行、大木幸子、若林チヒロ・HIV Futures  
Japan プロジェクトにおける「HIV 陽性者の  
ためのウェブ調査」の基本設計、第 27 回日  
本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2013 年  
11 月

高久陽介、井上洋土、矢島嵩、戸ヶ里泰典、  
板垣貴志、細川陸也、阿部桜子、吉澤繁行、  
若林チヒロ、大木幸子・「Futures Japan」HIV  
陽性者を対象とした調査における当事者参  
画の意義と効果に関する考察、第 27 回日本  
エイズ学会学術集会・総会、熊本、2013 年  
11 月

板垣貴志、井上洋土、戸ヶ里泰典、高久  
陽介、矢島嵩、阿部桜子、細川陸也、吉澤  
繁行、大木幸子、若林チヒロ・HIV Futures  
Japan プロジェクトの「HIV 陽性者のための  
ウェブ調査」におけるウェブ上の工夫、第 27  
回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、2013  
年 11 月

井上洋土、治療と社会的偏見の解消 HIV 陽  
性者の声の「みえる化」と「チカラ化」をめ  
ざす HIV Futures Japan プロジェクト、第 27  
回日本エイズ学会学術集会・総会、熊本、

井上洋土、戸ヶ里泰典、若林チヒロ、細  
川陸也、矢島嵩、板垣貴志、大木幸子・HIV  
Futures Japan プロジェクトの「HIV 陽性者  
のためのウェブ調査」基本設計と特徴、第

72 回日本公衆衛生学会総会、津、2013 年 10  
月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
HIV Futures Japan プロジェクト  
<http://futures-japan.jp/>

Futures Japan 調査サイト  
<http://survey.futures-japan.jp/>

Futures Japan 調査結果サイト  
<http://survey.futures-japan.jp/result/>

グラフで見る Futures Japan 調査結果  
[http://survey.futures-japan.jp/doc/Futures\\_booklet\\_v2.pdf](http://survey.futures-japan.jp/doc/Futures_booklet_v2.pdf)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 洋土 (INOUE, Yoji)  
放送大学・教養学部・教授  
研究者番号：60375623

### (2) 研究分担者

戸ヶ里 泰典 (TOGARI, Taisuke)  
放送大学・教養学部・准教授  
研究者番号：20509525

若林 チヒロ (WAKABAYASHI, Chihiro)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授  
研究者番号：40315718

### (3) 連携研究者 該当者なし